

委託事業実施内容報告書

平成21年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語指導者養成】

受託団体名 インターカルト日本語学校

1 事業の趣旨・目的

近年、日本に在留する外国人は増加の一途をたどっており、国内における日本語教育の対象となる外国人は、留学生、研修生などのほかに、定住者や日本人の配偶者などの日常生活を送る上で必要な日本語を学習する者が増加している。平成 20 年度の文化庁「外国人に対する日本語教育の現状について」の調査によると、その教師数において、ボランティア等の数が 16,065 人(51.9%)と最も多くなっており、それら教員の多くは前述の定住者や日本人の配偶者といった地域における日本語学習者への教授担当者であると思われる。

そのような現状の中、東京都台東区に位置する当校は、いわゆる外国人集住地区ではないものの、区の全人口の 7%近くを外国人が占め、特に小中学校等の公教育における外国人に対する日本語教育は決して十分ではなく、日本語指導者の養成が急務であるという現状が事前のインタビュー調査によって明らかになった。

当校で企画した講座では、地域の外国人児童に適切な日本語指導および学習上のサポートをする人材を養成するため、子どもの来日の背景を理解し、実際現場でどのような教科指導がされているのか、小学校、中学校、進路指導まで具体的な事例に触れることによって実践力を身につけようというものである。退職教員、現職教員、地域の年少者指導に興味のある方をその対象とし、多言語環境の子どもたちの教育の課題や来日の背景を把握しながら、日本語指導者のあり方についても考えるというのが趣旨であり、講座開設の目的でもある。

2 企画委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
2009年 5月29日 10:30～ 12:00	インター カルト日 本語学校	仙田武司 加藤早苗 谷口真理	・行政との連携 ・募集方法	・退職教員への周知の仕方 ・行政の協力体制をどう作 っていくか。
2009年 6月5日 15:00～	東京女子 大学	西原鈴子 石井恵理子 加藤早苗	・文化庁委託事業の意義 ・講座について ・募集方法	・自己紹介 ・委託事業の取り組みとは ・講座の目的の確認

16:30		穂坂晴子 谷口真理 大崎紀子	・行政との連携	・講座の内容、講師の確認 ・仙田氏の話に基づき、行政とどう協力体制をとっていくか。
2009年 6月22日 14:00～ 15:30	インター カルト日 本語学校	西原鈴子 石井恵理子 加藤早苗 穂坂晴子 谷口真理 大崎紀子	・講座内容の確認と微調整 ・開講までの流れ	・講座の流れ、講師の決定の報告など。 ・開講までの取り組みを話し合う。
2009年 9月10日 10:30～ 12:00	インター カルト日 本語学校	仙田武司 加藤早苗 谷口真理	今後の行政との協力体制作り	・今までの教育委員会とのやり取りの報告と改善点 ・講座終了後からの連携が大切。
2009年 9月11日 10:00～ 12:00	インター カルト日 本語学校	西原鈴子 石井恵理子 加藤早苗 穂坂晴子 谷口真理	講座開講に向けて最終の打ち合わせ	・募集の状況 ・受講生の状況の把握 ・講師へ講座に向けての連絡内容の確認 ・
2010年 2月5日 15:00～ 16:00	東京女子 大学	石井恵理子 加藤早苗 谷口真理	講座終了後の報告 今後の取り組み	・受講生とのネットワーク作りと今後の取り組み方。
2010年 2月27日 17:00～ 16:00	文化女子 大学	西原鈴子 加藤早苗 穂坂晴子 谷口真理	講座終了後の報告 今後の取り組み	・今受講生とのネットワーク作りと今後の取り組み方。

【写真】



3 養成講座の内容について

- (1) 養成講座名 「日本語指導者養成講座」
～子どもたちのための日本語教育サポート～
- (2) 養成講座の目標
1. より適切な日本語の指導および学習上のサポートをするために、多言語環境の子供たちに対する教育と課題、来日の背景をきちんと把握する。
 2. 年少者のための日本語指導上必要な教授法や教材について正しく理解する。
 3. 教科指導について具体的な事例に触れることによって、実践的な指導方法を学ぶ。
- (3) 受講者の総数 30 人
- (4) 開催時間数 (回数) 3 時間 (10 回)
- (5) 参加対象者の要件 教員退職者、現教員、地域の年少者指導に興味のある方
- (6) 受講者の募集方法
1. チラシ作成
 2. リタイアメントジャーナル紙募集案内掲載
 3. インターカルト日本語学校 HP 掲載
 4. 区報台東 募集案内掲載
 5. 台東区教育委員会協力依頼
 6. 台東区小学校、中学校に案内、訪問
 7. 墨田区、文京区、荒川区教育委員会協力依頼
- (7) 研修会場 インターカルト日本語学校 301 教室
- (8) 使用した教材・リソース 担当教師が作成したプリント、パワーポイント、講師の紹介書籍、DVD

(9) 講座内容(講座内容の詳細あり)

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
10/3 (土) 13:00~16:00	子どもが二つの言語 に出会うこと	元東京女子大学 教授 西原鈴子	23人
10/10 (土) 13:00~16:00	子供たちの来日の背 景と指導現場から見 えるもの	元神奈川県立高校非常勤 講師 秋間恵美子	24人
10/17 (土) 13:00~16:00	学ぶ力と言葉の教育	東京女子大学 教授 石井恵理子	28人
10/24 (土) 13:00~16:00	現場教師に学ぶ小学 校での実践的指導① —子どもたちの実態と 担任、保護者との連携—	港区立筭小学校 花島健司	22人
11/7 (土) 13:00~16:00	現場教師に学ぶ小学 校での実践的指導 ② —生活言語指導から教 科学習指導まで—	港区立筭小学校 花島健司	21人
11/14 (土) 13:00~16:00	現場教師に学ぶ中学 校での実践的指導 ① —学校生活適応支援と 日本語指導—	江戸川区立葛西中学校日 本語学級 小川郁子	24人
11/21 (土) 13:00~16:00	多文化共生センター での実践から —就学支援と地域での 進学指導—	特定非営利活動法人多文 化共生センター東京代表 王 慧懂	26人
11/28 (土) 13:00~16:00	現場教師に学ぶ小学 校での実践的指導 ② —JSL教科学習から 高校進学に向けて—	江戸川区立葛西中学校日 本語学級 小川郁子	23人

12/5 (土) 13:00~16:00	子どもたちの声を引き出す工夫 ～『こどもにほんご宝島』ワークショップ～	練馬区教育委員会日本語 指導講師 谷 啓子	27人
12/12 (土) 13:00~16:00	豊田市保見地区視察 報告 地域からの実践報告、 講座を修了にあたり 質疑、感想、交流	インターカルト日本語学 校代表 加藤早苗	21人

○講義実施日：2009年10月3日(土)

子供が二つの言語に出会うこと：報告

講師：西原鈴子

講義概要

子供が成長の過程において母語以外の言語に接触することによって、認知面、言語面の発達過程に

何がもたらされるのかを、言語接触、子供の言語発達、第二言語習得の観点から検討した。

以下は講義の内容である。

1. 二つの言語のいろいろな意味

1. 1 言語接触：複数の言語話者が一つの社会に混在することによる言語の相互関係

(1) 言語接触の起きる原因

- ・軍事的占領、植民地化などによる侵略によって強制的に引き起こされる場合

(2) 言語接触がもたらす結果

1. 2 言語接触がもたらすもの

(1) もとの言語が保持される場合 (language maintenance)

(2) 言語が取り替えられる場合 (language shift)

(3) 混交言語が生成される場合 (language creation)

1. 3 社会・文化のあり方が人々の言語に与える影響

(1) 「言語相対説=linguistic relativity」

(2) 言語相対説への批判

1. 4 複数の言語への接触が人々の言語にもたらすもの：言語転移

2. 社会のことば

2. 1 言葉の機能 (言葉は何のために使うのか)

2. 2 言語能力（言葉ができるとは何ができることなのか）
 2. 3 日常言語と学術言語（言葉の質の違い）
 2. 4 学校でのことばの関わり
 2. 5 学習方法とことばの関わり（ピア・ラーニング Peer Learning＝相互学習）
-
3. 多言語環境の子供たちに対する教育の現状と課題
 3. 1 子供はどのようにして多言語環境に入るのか
 3. 2 多言語環境を最大限に生かせば
 3. 3 二つの言語と認知能力
 3. 4 L1, L2 の微妙な関係
 3. 5 子どもの言語発達に関して考慮すべき要因
 - (1) 言語形成期
 - (2) 児童生徒の仲間関係
 - (3) L2 との接触によって起こること
 - (4) ダブルリミテッド・一時的セミリンガル現象
 - (5) 日本人児童の英語習得方略
-
4. 言語少数派の児童生徒に対する教育のあり方

○講義実施日：2009年10月10日（土）

子どもたちの来日の背景と指導現場から見えるもの：報告

講師：秋間恵美子

この講座は全10回あり、その中で、小中学校、地域等の実際の指導現場を踏まえた実践的な教授方法の講座がたくさん組まれています。そこで、この第2回目、私が担当させていただきました時間には、主に、私が実際の学校現場や地域での日本語指導を通して見聞きした実例を挙げながら、来日の背景、学校、地域社会での生活の様子をお伝え致しました。その際、私がさまざまな団体や機関の研修会でお話させていただいている「人権」という観点からも、事例をあげてお話いたしました。

また、ワークショップの時間もとりながら、以下の内容で進めました。

1. 背景把握の大切さ

日本語指導の対象となる子どもたちと、その家族の背景を理解することの大切さ、日本語指導者は、語学だけを教える存在ではないという認識を持つことの大切さを説明しました。

2. 日本語は外国語

普段、私たちが当たり前に使っている「日本語」を、今一度ここで考えてみるために、さまざまな例を出し、体験、実感できる場面も取り入れて、子どもたちやその家族が学習しなければならない「日本語の難しさ」を再認識できるようにしました。

3. 実例を通して知る背景

どんな国から、なぜ日本へ来るのか、そして、日本での生活は、差別や偏見は、というさまざまな角度から、実際に私が出会った子どもたちの事例を紹介しました。

4. 学校で現場での事例

私が学校での学習活動指導の中で見聞きした例を紹介。学校現場の一つ一つの現象をとらえることから、問題点の把握、今後の課題を見つける。

この事例を通して、学校と、児童生徒と、日本語指導者とがどういう形でかかわることが望まれるか、またそれを実現するためにはどうしたらいいかを、問題提起という形になりましたが、お話ししました。

5. ワークショップ

もし私たちが、日本語の通じない外国に行ったらという想定で、中国語を使いながら、「言葉がわからない困った体験」や、「少しでも分かった時の楽しさ、今後への意欲」を感じてもらおう場面を作りました。

6. 人権に目を向けて

日本がきちんとした制度のもとで受け入れた「ベトナム難民」の家族のことを紹介。子どもがいるということは、そこには家族がいる。その家族全体が日本でどのような生活をしているかを知ることの大切さ。子どもが日本語を学ぶ時間だけが、私達とのつながりではないということを、再認識していただくための材料提示。また、日本語指導を進めていく上で、必ず、人権という問題に突き当たることをお話ししました。

7. まとめ

日本語指導者は、「言葉を教える者」以上に「日本語学習意欲を向上させる者」として、存在すべき。また、子どもたちに自信、夢と希望持たせるための存在でありたいということで、まとめました。

8. 拙著「私の国は海のむこう」紹介

私が出会ったあるベトナム難民の一家をモデルに、書いたもので、今年度「神奈川県小中学校教員用人権学習ワークシート」の材料にもなりました。

実話をもとに書きましたので、身近な具体例としても、ご紹介させていただきました
2008年11月出版（東京図書出版会）。

○講義実施日：2009年10月10日（土）

学ぶ力と言葉の教育：報告

講師：石井恵理子

1. 文科省「日本語指導が必要な外国人児童生徒等の受け入れに関する調査」
平成20年度結果
2. 文科省「日本語指導が必要な外国人児童生徒等の受け入れに関する調査」
平成20年度結果
3. 日本語指導を必要とする子ども」とは
 - ・日本語指導を必要とする子ども」と「日本語指導を必要としない子ども」を
どこで分けるか？
4. 学校教育における日本語教育の目標
 - ・日本語の習得を通して学校での学習活動に参加するための力の育成
 - ・日本語による「学ぶ力」の獲得（JSLカリキュラムの基本理念）
5. 学習を支える日本語力
 - ・生活言語能力と学習言語能力
6. 一次的事ことばと二次的事ことばの特徴
7. コミュニケーション活動を考える2つの座標軸
8. 2つの言語の関係
 - ・共有基底言語能力モデル
9. 子どもの発達とことば
 - ・身体的発達
 - ・認知的発達
 - ・情意的発達
 - ・社会的発達
10. 子どもの言語発達の段階
11. 子どもの言語発達
12. J S Lカリキュラム（トピック型）活動の基本構造
13. 学び合うためのコミュニケーション能力
14. 協働活動の意味
15. 課題
 - ・学習機会の保障、学力の保障
 - ・「移動」する子どもたちにとって学習の継続が大きな問題
 - 地理的移動による断絶 教育課程の移行による断絶
 - 学習機会の断絶 内容面での断絶

○講義実施日：2009年10月24日（土）

現場教師に学ぶ小学校での実践的指導① —子どもたちの実態と担任、保護者との連携—：報告

講師：花島健司

1. 自己紹介
2. 学校、学級紹介
 - ・日本語学級とは、目的と指導内容、重点指導内容
 - ・使用教材、交流会・グループ活動
 - ・家庭との連携、学級担任との連携
 - ・その他
3. 子どもたちに必要なサポートとは
 - ・言語に関すること
日本語の習得、（その後・平行して）の教科学習
母語の保持伸長
 - ・生活習慣に関すること
日本の習慣の理解を図ること
児童生徒の持っている習慣の理解
4. どう受け入れるか
 - ・児童の実態の多様化
来日（編入学）の理由
保護者の駐在、研修、留学、国際結婚、呼び寄せ、日本で出生
出身国 来日月日・目的、予定滞在期間
 - ・学校への受け入れ
聞いておきたいこと、説明が必要なこと
5. 受け入れ学級での対応
 - ・学年、学級に外国人児童・生徒がいない
聞き取れない、話せない、見たことがない
学級みんなで受け入れる
1人1人の心で受け入れる
 - ・学年に2人以上外国人児童・生徒がいる
学級全体を考えた交流を配慮する
グループをつくってしまう
マイナスイメージからの脱却
6. 保護者と手を携えて
 - ・親のとまどい 学校行事、学習形態、PTA組織
 - ・保護者との連携 学校を知ってもらう、通訳、翻訳

- ・ボランティアとの連携
- 7. 日本語をどう指導するか
 - ・国語と日本語 ・日本語指導の特徴 ・カリキュラム ・指導方法と留意点
 - ・児童の背景 ・漢字、文法、語彙指導の工夫
- 8. 教科をどう指導するか
 - ①算数 ②国語 ③理科、社会 ④体育、音楽
- 9. 子どもたちのつまずき
 - ・語彙の量 ・母語との関係 ・日常会話の日本語、授業を理解するための日本語
 - ・生活習慣の違い
- 10. いくつかの事例をもとに
 - ・日常会話には困らない。学習内容を理解しているように見える。しかし、テストなどの結果に結びつかない。
 - ・腕時計をしてくたり、お菓子を持ってきてたり、学校のきまりが守れない。朝礼を嫌がる。

○講義実施日：2009年10月24日（土）

現場教師に学ぶ小学校での実践的指導②— 生活言語指導から教科学習指導まで —：報告

講師：花島健司

1. 子どもたちに必要なサポートとは
 - ・言語に関すること
日本語の習得、（その後・平行して）の教科学習 母語の保持伸長
 - ・生活習慣に関すること
日本の習慣の理解を図ること 児童生徒の持っている習慣の理解
2. 外国人児童と日本人児童との交流の場作り
実践事例「中国を知ろう」
3. 外国人児童教育上の課題
 - ・外国人児童自身の課題
適応、言語、学力、自尊心
 - ・受け入れた学校の課題
周りの児童への指導 組織作り 学外との関わり
4. 外国人児童と日本人児童の関わり
 - ・言葉 ・発達 ・協同性 ・居場所 ・子どもの学び ・わかる
5. 日本語をどう指導するか
 - ・国語と日本語 ・日本語指導の実際 ・指導方法と留意点 ・指導の工夫
 - ・カリキュラム

6. 教科をどう指導するか

- ・いつから
いつからでも 各時期に応じた教科指導
- ・何を
教科内容を
日本語を 教科の専門用語・表現
 学習活動用語・表現
 日常生活用語・表現
- ・どれくらい
まずは、半分
習得させたい学習内容
理解に必要な日本語力
理解に必要な基礎知識や技能
- ・どう
教科の「授業の流れ」に沿った指導案を
スモールステップで
ワークシートの活用
教科学習の支援は3つの視点で
 理解支援
 表現支援
 記憶支援
教科学習の支援の配慮は
 やさしい言葉で
 分かりやすく
 直感で理解できる→変化を見る
 「見る、聞く、考える」
 記憶の手助け

7. 教科をどう指導するか

- ・「国語科」
「参加できない」から「参加させよう」へ
JSLカリキュラム「国語科」のねらい
JSL「国語科」授業の作り方
- ・子どもたちのつまずき
語彙の量 母語との関係
日常会話の日本語、授業を理解するための日本語 生活習慣の違い

○講義実施日：2009年11月14日（土）

現場教師に学ぶ中学校での実践的指導①—学校生活適応支援と日本語指導—：報告

講師：小川郁子

【1-1】東京都（23区、26市）における行政の支援：学校や教育委員会が関わる支援～みなさんが支援している／これからしようとする地域はどんなシステムですか？～

◆東京都における地域別の支援状況を知る方法

【1-2】東京都設置の日本語学級というところ

【1-3】東京都における行政の管轄外、学校外の支援の機会

【2】中学生に必要な支援の全体像と中学生の学習支援モデルプラン

- | | |
|---------------|------------------------|
| 1. 学校生活への適応支援 | 5. 母語・母文化保持とアイデンティティ |
| 2. 日本語学習 | 6. 仲間づくりとセルフエスティーム |
| 3. 教科学習支援 | 7. 学校全体へのはたらきかけと国際理解教育 |
| 4. 進路支援 | |

◆中学生の学習支援モデルプラン

【3-1】適応指導と初期指導のシステム

【3-2】入級面接

【3-3】入級初日にやること（母語で行う）

【3-4】学習開始：サバイバル会話とひらがな・カタカナを同時並行

1. サバイバル会話
 2. 文字指導：ひらがな（最初の一週間で終了）
 3. 進度調整：『日本語学級1』で教科名を取り上げる13課までに、特殊拍を終了する
 4. 学校生活適応学習（これを通してひらがなの定着をはかる）
 5. カタカナ（1週目の木曜ぐらいから、自宅で練習開始、2週目の最初にはできるように）
 6. 教科につながるカタカナ、カタカナと教科の統合学習
 7. サバイバル学習中に、自宅の住所と学校名の読み書きまで漢字でできるようにする
- 【3-5】集中学習最終日：学校生活ガイダンス（39・40時間目：母語を使って）

【4-1】日本語学習：初期指導（『日本語学級』2～『みんなの日本語初級』1）

前提 ①中学生は系統的文法学習が有効（母語で文法説明をしてよい）

②日本語教科書の文型学習だけでは不十分

1. 読解：精読と多読の併用
2. 作文（2時間まとめて取り組もう）

【4-2】日本語学習：初級後半の指導（『みんなの日本語初級』2）

○講義実施日：2009年11月21日（土）

多文化共生センターでの実践から— 就学支援と地域での進学指導 —：報告

講師：王 慧 檣

I 日本社会の外国人

1. 日本で暮らす外国人

人数：外国人登録者数・オーバースティの人数

東京都総人口 ・区部の人数

○オールドタイマー（オールドカマー）

○ ニューカマー（新渡日）000

2. 外国人は「お客様」？ それとも同じ地域で暮らす住民？

○生活基盤と基本的人権

3. 「日本語が（母語）の外国人」と「日本語を母語としない日本人」

○外国人の実態について

II 外国籍の子どもたち

1 東京都23区の子どもの実態（2007年度）

2 東京都の外国籍中学生と高校生

3 ルビふり受験からみるデータ

III 外国にルーツのある子どもたちが、将来の新たな貧困層とにならないために

1 学齢超過児の現場

2 入試の現状と課題

3 東京都の私立高校と都立高校の定員についての見直しが必要

4 来日年数の浅い生徒の高校入学の枠を広げるための「特別枠」を増やす必要

○講義実施日：2009年11月28日（土）

現場教師に学ぶ小学校での実践的指導②— J S L 教科学習から高校進学に向けて —：報告

講師：小川郁子

【5】漢字学習～教科学習の生命線、漢字ができないと教科書や問題文を読み取れない。

1. カタカナ終了後すぐに開始

2. 教材と使い方

3. 自力訂正の方法を教える

4. 漢字指導5原則

【6-1】教科学習、何をどこまで？ どうやって？

1. 目標：教室の授業に参加する 日本語で学び、知識を獲得し学習体験をつむ

・日本語だけ学習しては、教室の授業はわかるようにならない。

- ・日本語のレベルも引き上げなければ、教科の日本語は理解できない。
- 2. いつから始める？ →最初から
 - 理由：中学生は脳の成長・発達の途上積み上げの教科は途切れたら追いつない
- 3. やること
 - 1) 在籍学級の授業の内容：1／6に精選（2週間分を1時間でやる目安）
 - 2) 未習内容の補充（国によるカリキュラムの違い）
 - 3) 受験の支援：未習部分、未理解部分の総復習、過去問からさぐる
- 【6－2】第一段階の教科学習『日本語学級』1・2を学習中（約半年）→母語で
- 【6－3】第二段階の教科学習（『みんなの日本語初級』1 日本語能力検定4級程度）
 - 1. 定期考査対策 きちんと準備をしてテストに参加する
 - 2. テスト前教科学習の実際
 - 3. 教科の先生との連携
- 【6－4】第三段階の教科学習（初級後半『みんなの日本語初級』2）
 - 1. 文科省 JSL カリキュラム（中学校編）H19年3月
 - 2. 教室授業との関連：「今やっているところ」の前後をひとまとめにして
 - 3. 教科と日本語を同時に学ぶ
 - 4. 教科学習の実際
 - 5. 教材入手法

○講義実施日：2009年11月28日（土）

子どもたちの声を引き出す工夫 ～『こどもにほんご宝島』ワークショップ～：報告
 講師：谷 啓子

講義概要：

学校やボランティアなどの現場で年少者と接するにあたって、支援者が決めたものを一方的に与えるのではなく、子どもの内面にあるものを引き出すためには？を受講生と一緒に考えた。前半では題材として、担当者が支援した子どものタイプと実践例を紹介した。

後半は活動集『こどもにほんご宝島』を体験した後、グループでオリジナルのページ作りに取り組み、今後の支援の参考とした。

- 1. 外国にルーツをもつ子どものいる在籍学級への参与から
 - （1995 群馬県太田市、1999 神奈川県横浜市）
 - 日本人の子どもたちの反応
 - ・日本語ができない＝その他のこともできない？（能力全体を低く見る傾向）
 - ・最初は珍しい⇒慣れる・飽きる
 - ・高学年になるほど遊びや人間関係が言語に依存
- 2. 子どもの指導：大人の指導との違い

子どもは心身ともに成長の途中

一心と身体への配慮

一認知面への配慮

ことばの形式を教えるだけではなく、生活・学習に関わる内容も含めて
ショートステップ（あせらず）くりかえし（確実に）

3. 派遣指導の現場から：派遣指導のシステムと特徴

- ・ 周囲との協力体制
- ・ 学校に用意してもらうもの
年間行事予定表 時限表 学年の教科進度表 学校の見取り図
クラスの時間割 学年だより クラスの座席表 ネームタグ・下駄箱
教材の保管場所 担任との連絡ノート
- ・ 学校側への挨拶（できれば教職員全体） クラスメイトへの挨拶
- ・ 派遣による個別指導： 長所 と 短所

長所

<授業>

子どもの個性に合わせた内容・ペースで指導できる
心身の状態に十分配慮できる

<派遣の立場として>

外部の（専門性がある）人間として意見が言える
意識的に学校との関係作り → 気付きを与える存在になれる可能性も

短所

<授業>

活動がしにくい（ゲーム、ロールプレイ） 競争相手がいない
長期的に指導できない

<派遣の立場として>

各種情報が断片的 「評価」がない・研修がない
横のつながりが持ちにくい（自治体による）

4. 多様な子どもたち：‘空白の時間’と‘見えにくい理由’

- ・ 3タイプの子どもの支援について受講者と検討
- ・ イタリア語で算数の文章題体験

5. 『こどもにほんご宝島』コンセプト紹介と体験：子ども役と支援役になって

6. 作ってみよう！オリジナル宝島

テーマ 選び

イメージをふくらませる最初のイラストや写真例

活動案⇒まとめ方

○講義実施日：2009年12月12日（土）

豊田市保見地区視察報告：報告

講師：加藤早苗

目的

ブラジル人集住地区である愛知県豊田市の保見地区における外国人に対する地域の現状、学校、行政の取り組み、または地域との連携を視察し、この講座の受講生にフィードバックする。保見地区の現状を受講生とともに考え、話合うことで今後何ができるのかを受講生同士で共有できる場としたい。

1. 保見ヶ丘ラテンアメリカセンター

県営保見団地内にある特定非営利活動法人である。団地住民 9000 人中 4000 人が日系ブラジル人やペルー人などのラテンアメリカ地域からの外国人で占められている。その団地内にあるパウロフレイレ地域学校は、母語のポルトガル語やスペイン語で学ぶことを選択した子供たちが学ぶバイリンガル学校である。カリキュラムもブラジルの学校に合わせたものとなっており、帰国しても困らない母語能力と知識を獲得できる。

2. 東保見小学校

豊田市立の学校で、児童 448 人中 119 人 25パーセントが日系ブラジル人などの外国人が通っている。平成 4 年から国際教室が始まった。教科指導と日本語指導をする「取り出し授業」で、在籍学級に戻る学力をつけ、教室内の「入り込み指導」で学習態度や持ち物指導を通して在籍学級で自信を持って学ぶ力を付けることを目的としている。今までは、出稼ぎでいずれは国に帰る人が多かったが定住する者が増え、今後は進路の問題、教科指導の問題が課題である。

3. 西保見小学校

外国人児童が半分を占める学校である。

西保見小学校には、通級学級があり、ブラジル、ペルーの子どもたちが日本語を勉強している。時間の制限はなく、教室に戻っても大丈夫なレベルになるまで、通うことができることが特徴である。その判断は、担任と通級学級の先生とで話し合いをしながら決定する。中学校との連携もよく取れているとのこと。

4. 豊田市国際交流協会

交流、理解、共生を柱に、ボランティアによる日本語サロンや日本語指導ボランティア養成講座など地域での幅広い交流活動をしている。平成 20 年からは名古屋大学と連携して「とよた日本語学習支援システム」を始めた。企業内日本語教室や地域日本語教室など、困っている外国人のニーズに答える教室作りが目的である。その為には、クラスのプログラム作りやパートナー派遣などを考えるプログラムコーディネーターがとても重要になる。このコーディネーターの育成では、日本語学校の持っているスキルを使えるの

ではないかと思った。

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

当講座では、受講日ごとに当日のアンケートを実施し、感想の記入を依頼した。回収率は100%。また、講座終了後、全体を通しての感想と今後の課題についてもアンケートを行った。いくつかを例として下記に転記した。

① 10/3 (子どもが2つの言語に出会うこと 西原鈴子)

- ・豊富な具体的事例が示され、理論と現場のことが同時にわかり感動した。
- ・子どもの言語発達や内面をしっかりと理解した上での実践が必要だと学習の大切さを認識した。
- ・子どもが外国語を学ぶ時のプロセスや心理的状况などの文献を交えた学習は勉強になり、自分の経験と照らし合わせた。

② 10/10 (子どもの来日背景と指導現場からみえるもの 秋間恵美子)

- ・現場経験がない自分にとって学校現場での日本語教師の話は衝撃的で、ぜひ子どもたちのサポートをしていきたいと思った熱い話だった。
- ・子どもを教える場合、教える側の資質もより問われると自分を振り返った。
- ・子どもたちの来日の背景とその後の現場での話は今まで知らないことが多く、今後につなげていきたいと思った。貴重な話を聞いた。

③ 10/17 (学ぶ力と言葉の教育 石井恵理子)

- ・難しい内容をわかりやすく話していただき、新発見があった。1次的ことば、2次的ことばの微妙な関係がわかり、今までの悩みが解決できた気がした。
- ・大人とちがう年少者教育の難しさを痛感。学習面でのサポートも必要だと思った。奥深さと責任を感じた。お手伝いをしたい。
- ・来日した親へのサポートの大切さも改めて感じた。

④ 10/24 (小学校現場から 花島健司)

⑤ 11/7

- ・実際の学校現場での多くの事例や生の声が聞けて、興味深かった。
- ・日本語学級での保護者・担任との連携が具体的に伝わってきた。
- ・文化・風習の異なる子どもたちの指導の難しさと配慮の仕方や子どもたちにどう寄り添っていくのか、先生の姿勢が伝わってきた。
- ・母国語の基礎ができていないと学力が身に付かないことが分かった。

- ・処方箋のような話現場での疑問が一つ解決した気がした。
 - ・グループワークが面白かった。
- ⑥ 11/14 (中学校現場から 小川郁子)
- ⑦ 11/28
- ・初期指導時の子どもたちの様子や指導の在り方について、教材の使い方等具体的に示され大変参考になった。
 - ・日本語だけでなく生徒の将来、生き方を視野に入れた大切な仕事だと分かった。生徒の悩みに心を寄せ、とてもわかりやすく素晴らしい講義だった。
 - ・学校と地域の連携をどうするか、考えを伺いたいと思った。
 - ・来月からボランティアに参加しようと決めた。ボランティアにも重要な役割があるのだと知り、大変参考になった。がんばります。
- ⑧ 11/21 (多文化共生センターから 王慧権)
- ・このような支援があることを全くしらなかった。ビデオを見て衝撃を受けた。今日は知ることができて、興味深くうれしかった。
 - ・外国人の子どもたちの内面の葛藤を知ることができた。このような環境を作ることは大事。自分も取り組んでいきたい。
 - ・進学は子どもたちにとっても大きい。改めて考えた。
 - ・知ることは力になることを教えられた。地域を超えて協同の輪の広げていく巣立ちの場を提供していただいたことに感謝したい。
- ⑨ 12/5 (子どもたちの声を引き出す工夫 谷啓子)
- ・具体的に手に取るようにわかり、すぐに実践に役立てる話だった。
 - ・資料が豊富で楽しくイメージしやすかった。自分で作る体験もでき今後のヒントになると思った。
 - ・なんと心憎いばかりのローテーション。1回目から8回目までの講義を聴き、蓄積された後なので、すべて脳の棚の中にスイスイ入っていく感を味わった。
- ⑩ 講座終了にあたり 交流と今後についてのディスカッション
- ・保見地区の状況など、初めて知ったことが多くあった。とても勉強になった。

全体を通しての感想

- ・こういう講座を経験豊かな人達と受講できることを大変うれしく思った。
- ・こんなに理論と実践が一体になった企画に初めて出会った。
- ・毎回、心を揺さぶられる講座を企画していただいたことに感謝している。
- ・当初は自分の現場に照らしながら興味本位で聞いていたが、回を重ねるうち

感動し、地元の地域にいるので、自分のできるところで発信役にならなければと思った。

- ・非常に内容の濃いまた具体的な講義で、わかりやすく日本語を母語としない児童のことがよくわかった。
- ・子どもの日本語教育の現実を今回の講座で知ったが、同時に子どもの周囲には日本語の不自由な親がいることも知った。大変ためになったので、後は行動起こすのみ。
- ・毎回とても刺激的で、すぐ役だつ話も聞けたが、それだけでなく深いところで子どもに接するときのバックボーンになるもの話を聞け、勉強になった。
またこういう講座を開いてほしい。
- ・素晴らしい講師の方たちの話を聞け、いい勉強になった。それにも増して今回は現場で携わっている参加者の話が聞けて面白かった。
- ・人の心身の成長にことばが基本であることを理論的に学べて有意義だった。
心にしみる話に手伝いたいと思った。
- ・さまざまな場で心をつくしている方がいることは一番心強い。若い人からも学んだ。
世代を超えつながりができ、素晴らしい。
- ・最後の交流会で参加者の感想・意見を聞け、感動した。
立派なカリキュラムがあっても学ぶものが意欲を持たなければ不発になる。
その指導の大切さを学んだ。
- ・参加者の想いや不安を知り、この後、各地域各方面でがんばっていけるのだと思った。
新たなネットワークもでき参加して良かった、またこのような有意義な講座に参加したい。
- ・日本語教育も対象が異なれば支援が違うことを痛感。意見交換や情報交換できたことも良かった。1か月に1度くらい集まれば良い。
- ・自分の視野が広がった。今後の地域の活動に活かしたい。
ネットワークができ貴重な機会となった、今後も積極的に活動していきたい。
- ・子どもが好きで参加したが、思った以上に難しい分野だと思った。心のケアも必要でやりがいのあることだと思った。学んだことをいかしていきたい。
- ・今まで疑問に思っていたことや新たな課題が講座を聞き、解決策がわかった気がする。
地元なので困った時などの架け橋になりたい。
- ・さまざまな成長段階や日本語レベルに応じた支援が色々な場所で受けられるネットワーク作りができたらと切に感じた。

② 実施主体からの研修内容結果評価

初めての取り組みで、思考錯誤しながらの組み立て、スタートだったが、毎回いただくアンケートでの感想に実施側が励まされた。最後の交流会での一人ひとりの宝物のよ

うな感想の言葉に感動し、無事に終了できたことを感謝している。

年少者教育を実施する講座が少ない現状にも規定され、「今まで知らなかった分野のことを理論、実践面で聞くことができ、目からウロコの様だった」「学校現場での実態は知らなかったが具体的に聞けて視野が広まり、今後活かせる」「初めはどんなものかと思っていたが、回を重ねるうちに驚き、自分も実践の場で発信役にならなければと思った」「講座の組み方の質の高さに感銘した」「今まで学習支援はしていたが日本語の世界に触れるのは初めてで、新鮮でまた面白かった」などと恐縮するような言葉をいただいた。一つひとつの講座の講師陣の質の高さ、素晴らしさが大きい、実践面にポイントを置き現場と具体的指導に焦点を絞ったのが、高い評価につながったのだと思う。また、多くの方が参加者の現場の話に感動していた。色々な地域、経験者が参加した中で、その話を引き出し、今後の課題に向け共有化し、課題にして論議できたことも良かったと思う。さらに、地域での日本語学校主催の講座という点も幸いしていると考え。場、教材、人材がそろい豊富な点を活かし、地域で1歩を作り上げたことは大きい。アンケートなどから受講者の評価は高かったが、地域での「年少者教育」の講座は初めての取り組みで、当校は引っ越してからまだ日も浅く、また当初は退職教師を主な対象にしていたが、集まった方たちは地域・職種・経験等多様であったこともあり、地域の情報やそれぞれの参加者のニーズをどれだけ満たしたかは、今後の課題としてさらに深めたいと思う。今後も今回の実施で作られた教育委員会やボランティア団体、個人との結びつきを大切に地域でどのように実践的に活動をしていくかを考え、実行に移していきたい。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

受講者には講座開始の説明の時に毎回当日の講座の感想のアンケートの他に、「地域での取り組みと今後について」というタイトルでそれぞれの住んでいる地域や活動している地域での実態（地域での外国人の児童数、ボランティア団体や活動の実態、公的機関の支援状態、今後どのような活動ができるか、なにを望むかなど）把握のための参加者アンケートを配布し、最後に提出してもらい、その資料をもとに交流会論議を行った。提出資料なども参考にしながら、主催者として今回の講座でできたネットワークを活用し、活動拠点となるような態勢を考えていきたい。

実際、講座終了後、メーリングリストを立ち上げたが、情報交換し、地域でのボランティア活動にすでに参加している方たちもいる。

地域の日本語学校というメリットも活かし、定期的な研修や雑談・情報交換の場ができ、そこからまた広げていけたらと考えている。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

今回は「指導者養成講座」の他にインターカルト校主催で「親と子の日本語教室」、「ボランティアを対象にした現職日本語指導者のための実践的講座」も同時期にインターカルト校で実施した。内容的には重なる部分もあり、目指すものは同じである。情報交換・人材交流を図りながら今後の充実化をめざしたい。

また、参加者は地域ですでにボランティア団体に属し、現場での活動を担っている方も多く、今後立ち上げようとしているところもある。大いに連携を図り、今後に繋げていきたい。さらに、今回の講座で繋がりができた地域の教育委員会・学校・ボランティア団体との連携を強くし、広げていくために努力することは大きな課題である。

② 研修後の人材活用

講座の受講者の中にはすでに「日本語教師」として働いている方や「日本語教師」を目指している方もいた。でも年少者教育は学んでいる方は少なく、今回の講座受講後、年少者教育の場で活躍される方もいることと思う。

学校現場の参加者の方の感想などからも、今までと違った角度から活躍されることが窺い知れる。また、重複するが、受講後すでに地域の現場に見学に行ったり、サポートに行ったりなど、受講参加者の具体的な行動も始まっている。情報交換しつつ、さらにもともに学べる場をつくり、地域で活動できる人材育成へと結びつけたい。

(12) 今後の課題

日が浅い地域での日本語学校主催の取り組みとしては初めてで、悩みながら試行錯誤を繰り返す過程であったが、その中で見えてきた課題はいくつかある。

当初は地域での退職教員を対象にした募集であったが、募集もうまくいかず、なかなか集まらない状態で人脈をたどりながら探した。教育委員会とのつながりや地域のボランティア団体の活動の実態も把握できず、学校での取り組み状況や子どもたちの様子も分からなかった。しかし、学校まわりや所連絡を繰り返したり、地域の方との関係を探りながら、区報に掲載できたこともあり、当初の予定より多い参加希望者が集まり、お断りするところまでいった。

また教育委員会や学校とのつながりも今回の講座実施の過程で入口にたったと言えると思う。地域活動の実態や学校の現状の一部も知ることができた。

地域の受講者の方から、「最初は自分のやっていることの勉強になればぐらいに思い

聞いていたが、回を重ねるうちにこれは実践的にやらねばならないと思い、地元なので地域での架け橋になり、発信していかなくてはと思った」という声が最後に聴けたのは、何よりもの成果だと思う。

今回の実施の中でつくられたつながりや講座で学んだことを糧にさらに地域での諸団体などとの連携を図りつつ、日本語指導者養成という大きな課題をめざしたい。今後はもっと積極的に学校や教育委員会などにも足を運び、地域の現状を把握し、話を聞ける場作り、活動をしていきたい。

受講後、希望者を中心に実践的な情報交換と語り合う場作りのためにメーリングリストを作り、すでに開始している。参加者の感想の文中の言葉から「井戸端ネット」と命名した。外国の子どもたちに普通のおじさん、おばさんとして普通のこととしてサポートする、そのためにはどうするか‘具体的に考えていきたいという発想である。また、アンケートや参加者の声にもあったように、修了後も学べる場がほしいという声をなんとか実現できないか考えている。幸い地域の日本語学校という環境の整った場もあり地域の発信の拠点になり、尽力できるかと思う。

来日する外国人が増えているが、地域で生活者として安心して生きるためのニーズにあう態勢は確立されていない。年少者の教育においてはいっそうで、課題は大きい。今回1歩を踏み出したことによって受講当該地域以外にも広くその種は蒔かれたともいえる。その実現のためにも、今回の実績を振り返り、糧にして、一層の努力をしていきたい。